

## 芭蕉連句研究（四）：「此里は」の巻

杉浦，正一郎

<https://doi.org/10.15017/2332870>

---

出版情報：文學研究. 55, pp.55-69, 1956-09-25. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

芭蕉連句研究 (四)

「此里は」の卷

杉浦正一郎

「此里は」の卷 (『俳諧會我』所收)

此里は山を四面や冬籠り

青うて細くけふる炭籠

いぶせさは衛一種の旅をして

波に飛込船の遠浅

降くて今日は無疵に出る月

残る暑さの門の行水

ウ小地頭の前に並居ル秋薄

終りのしれぬ下手の舞く

鈴馬の拍子に乗つて口を取ル

代継を祈ル九世の観音

佗人に明けてほどこす小袖櫃

あらははらめく谷の笹原

熊の子の親を尋ねて鳴て居ル

切つて附たる庵の三ヶ月

寒初る罌罎裏普請に取かゝり

鶉の籠は形がきはまる

支考

淡水 白雪 芦雁 桃隣 扇車 以之 桃先 芭蕉 雁隣 丸車

花散りて綴は二葉に萌上り

春ともいはぬ火屋の白幕

名やうくと峠にかゝる雲霞

複子のしめる味噌の曲物

手を書と童に筆をとらせける

明松を廻す夜仕事

海少へだゝる水のしはゆき

秋風すごし義朝の墓

そば切のあれ行儘に道附て

小つらのにくき衣の月

さまんの恋は馬刀貝忘れ貝

乞食と成て夫婦かたらふ

さしむくる背中の雪を打はらひ

されたる弦を押なほす弓

名ウ素湯一ッ御寺見かけて呼びけり

荷を負ながら牛は寐ころぶ

めたくと日向の方の花盛り

之 桃 鯉

水 蕉 同 雪 後 先 鯉 丸 考 蕉 雁 之 車 後 雪

柳の糸がひたる石鉢

念仏にすゝめこみたる蝶の夢

又幾度の彌生目出度

水 先 隣

「此里は」の巻

「此里は山を四面や冬籠り 支考」の発句を立句としたこの歌仙は、元祿十二年刊、「東三河白雪」の編著『誹諧曾我』に始めて発表された作品、芭蕉生前には世に出なかつたものである。以下考へてみる如く、連衆に初心の人が多く、出来が余り良くないので、芭蕉が或ひは発表を許さなかつたものかも知れない。

芭蕉は、元祿四年九月二十八日、近江の無名庵を立ち出で、帰東の途に上り、湖東平田、美濃垂井、大垣、尾張熱田等にそれぞれ句を詠み、俳諧を巻ぎして下つて行つたが、十月下旬三河新城に白雪を訪ねて、土地の人々と歌仙二巻を興行した。一卷は白雪の長子桃先と、甥の雪丸が共撰、同じく元祿十二年に上梓した『茶のさうし』にみえる「其にはひ桃より白し水仙花」翁の立句以下、白雪、桃隣、芦雁、支考、以之、扇車、淡水、桃先、桃後、雪丸の十二吟歌仙で、他の一卷は即ち本巻である。本巻も亦、支考、淡水、白雪、雪丸、芦雁、桃隣、扇車、以之、桃先、桃後、芭蕉、桃鯉の十二吟で、連衆は全く同じ顔振である。なほ本巻は、『誹諧曾我』の他、『桃の白実』にも出てゐるが、兩者の異同については本文中に注意する。芭蕉の供をしてゐる支考、桃隣の兩人は、十月二十日尾張熱田辺から同道してゐるやうである。芭蕉は熱田に数日滞在、江戸帰着が十一月朔日故、この新城滞

留はほんの二、三日程度と思はれる。芭蕉はこのとき、白雪の二人の子供に、桃先、桃後の号を与へたことは、支考の『笈日記』に次のやうに見える。

新城はむかし、阿叟（註、芭蕉）の迨遙せし地也。なにがし白雪といふおのこ、風雅の子ふたりもち侍る。二人ながらいとかしこぞ侍る。阿叟もその少年の才をよみして、是を桃先桃後と名づけ申されしを、支考も名の説をかきてとゞめける也。

其にはひ桃より白し水仙花

これは水仙の花を、桃前梅後といへるより、かくはいへるなるべし。

此里は山を四面や冬籠り

支考

（釈）○発句。冬（冬籠り）。○冬籠。例、「折々に伊吹を見てや冬籠 芭蕉」〔笈日記〕「金屏の松の古さよ冬籠 芭蕉」〔炭俵〕。

（評）此里。新城。『日本地名大辞典』に、「愛知県三河国南設楽郡の南部、豊橋市の東北約十五軒、南には豊川を距て、赤石山脈に続く古生層の弓張山脈走り、豊川は日本の内外帯の境界をなし、本町附近にも河岸段丘を作りて西南に至る。此谷は洪積層を以て埋められ、新城町は段丘上に立地す。大体段丘面は桑畑に、段丘下低地は水田に利用さる。本町は伊那郡街道に沿ひ…此地は和名抄、設楽郡賀茂郷の地に当るが如し。新城とは野田新築の意

味にして、もと大野田といひしが、野田城が武田勢に引渡さるゝに及び、菅沼定広こゝに新城を築く。新城址は東入舟にあり、前面絶壁にて豊川に望む：：豊川北岸の地に桜淵の名勝あり、前面には巨巖屹立、断崖絶壁をなし、崖上は森を隔て、広漠たる山野に臨み、崖下は深淵青藍を湛へ、奇岩快石乱立して実に風景絶景の地たり。寛文二年、時の城主菅沼撰津守定実は臣下に命じて桜樹を植ゑしめしより、桜の名所となり、桜淵と称するに至れり。」とある。

発句の意味は、この新城の里は、山が四方にあつて、その盆地の底のやうな、温暖なこの桃源境で、図らずも人々の好意で、我らも冬籠の仲間に入れて貰つてくつろいでゐる事よ、と芭蕉ら師弟三人をあたゝかく迎へてくれた新城の人々への支考の挨拶がふくまれてゐると思ふ。この時、一向は鳳来寺に参籠したが、新城の領主菅沼耕月亭にも招かれて、芭蕉はそこで、「京にあきて此木がらしや冬住居」の句を得た(『きれく』『笈日記』)。この土地の「冬籠」や「冬住居」が、「山を四面に」にして余程、印象的だつたのであらう。

青うて細くけぶる炭籠

淡水

(釈) ○脇句。 冬(炭籠)。○青うて。「青みて」(桃の白実)。

○炭籠。 炭焼の時期は現今では何時とは限られてゐないが、昔は農家で冬籠の副業として炭を焼いたもので、沿革的に冬の季節として今日も残つてゐるのであるが、炭が冬である以上、炭焼も炭籠も冬の季節としての季節感を失つてゐない。

(評) 発句・脇一体となつて一幅の景をなす。発句に同じく景で

打添へた附方、前句の自然の山々に、立ちのぼる煙をつけることによつて動きが加へられた。

炭籠から揚る煙の色は、炭の焼け工合を示しつゝ、黄・黄褐・褐・青・薄浅黄と変化し、焼け終る頃は透明になるといふ。人家の煙突のそれとは全く違つた感じの「青うて細く」けぶる煙を、作者はこの連句の席から望見し乍ら、思ひついたのかも知れぬ。この歌仙の興行された十月下旬頃は冬に入つて、炭焼もさかんに行はれてゐるころである。作者、淡水は『誹諧曾我』に、

坂井何某か二階座敷に、今年も

かはらず各々月見

二つ有事は三つ有りけぶの月

巢に通ふ鳥や世間の恩送り

鹽  
淡土  
水  
淡水  
水

と出てをり、この二人が同人ならば、美濃の麻生の人といふ事になるが、この連句の脇句をつけてゐるのをみると、この歌仙は恐らく淡水亭での作とみるのが常識で、淡水がこの歌仙の亭主だとすると、やはり「隠士」淡水の方は新城の人なのであらう。但しその席の亭主が、脇をつけないで第三をつとめてゐる例も、『市の庵』所収、「柳小折」の巻が、元禄七年「閏五月廿二日、落柿舍乱吟」と題して、芭蕉発句、洒堂脇句、第三去来とつゞいてをり、又「雪まろげ」所収、「御尋の」の巻が出羽新庄の「風流亭にて」の歌仙に、亭主風流発句、客の芭蕉が脇句をつとめてゐる例などあるので、必ずしも淡水亭での興行とはきめられない。或ひは「茶のさうし」所収、「其にほひ」の巻、同様に白雪亭で巻かれたもので、たまたま美濃の淡水が一座したので脇句をつけさせたのかも知れぬ。いづれにしても、淡水の事がはつきりつかぬ

ぬので詳しくは考へ得ない。

いぶせきは衛一種の旅をして

白雪

(釈) ○第三。冬(衛。千鳥)。○いぶせき。いぶせきやま。

気がはれず、うつとうしき。○一種。用例「風ふるゝ手蕎麦一種を我宿に」(『俳諧聞相撲』天和二年刊)。「ふる手な有取をい、かばやき一種で吞あかす」(『長町女腹切』中巻)。景物らしいものは千鳥だけといった単純きはまる旅のいぶせき。○衛 千鳥。

(評) 発句脇句の、山里・冬籠りから、海浜・旅へ、静から動へと転じた。こゝに冬の句が三句続いてゐるのは珍らしい。

附合は、千鳥ばかりの海路の旅をして来た目には、炭籠の煙が目新しく写る。冬の船路の旅から山腹の炭やきの煙をながめて、しばし感慨にふけつてゐる駄。所謂逆附的な附方である。作者、太田白雪は寛文元年三月五日生れ、幼名を平九郎と云ひ、のち金左エ門長孝と称した。又、密雲峰・有髮散人とも号した。祖父元補は医で土地の名望家、父は彌平太重長といひ、子孫代々庄屋をつとめ、升屋と号した。白雪の墓は新城町永住寺にあり、享保二十年六月七日、七十五で歿した事を誌してゐる。この芭蕉の新城曳杖のときは、白雪三十一才の時に当るから、その二子の桃先、桃後ともまだ幼少で、弟の桃後はこのとき十一才と思はれるから兄の桃先も十二、三才位であらうか。とにかく白雪の一族は文学に心をよせる人が多かつたと見えて、『俳諧管我』に、

ゆるぎ出る芥形

かしくもまたのにくぐる相撲哉

先彌平太

重長

時宗が相撲とらぬは哀なり

兼房が鷲尾しかるすまふかな

親の子であれが相撲も手ばしこい

さぶくくと茶漬で出ルヤ聞相撲

二百石取ッて投出す相撲かな

重長 長子  
白雪  
其 桃先  
其 桃後  
父方後  
父方後  
千鳥  
鴈  
母方いどと  
桃鯉

と一門の連衆が顔を並べてゐる。父重長の句は『茶のさうし』や『きれん』にも出てゐるが、こゝに見える桃先、桃後の句はいづれも幼く、子供らしい作である。桃先の墓は「東林放牛二代太田金左エ門重英」とあり、享保十年二月十日、父白雪にさきだつて歿したらしい。初め新四郎といひ、元祿十二年、醉屋雪丸と共に撰で『茶の草子』を出版した。桃後のことは白雪の次子で、半四郎と称したこと以外不明。白雪は郷土史の研究に専念してゐたらしく、野田別天楼氏の「蕉門珍書百種」の『三河小町』の解題によると、『三河国名所詩歌連俳目録』、『新城雜旧記』、『大野沢開書』、『新城聞書』、『独案内』、『順礼歌抄』、『三河観音道場來歴』、『鳳来寺行脚』、『題しらす』、『ひなあそび』等、多くの編著があつたらしい。俳諧の方面では、『俳諧管我』(元祿十二年刊)、『きれん』(元祿十四年刊)、『三河小町』(元祿十五年刊)の三部の撰集が知られてゐる。支考の『南無俳諧』(宝永四年刊)の「俳諧未來経」に、「……湖東の許六は其作におかしミを得たる人也。ミつから菊阿仏と称して、門人へすへて阿羅漢也けり。国々、其風流を学ぶものへ、三河に白雪といふものありて蕉門のかたはしに作者のたましゐを得て、撰集に人をおとろかさすといふ事なし。彼か俳諧ハきれん集につきて、其年の歳旦にハそこの門人の俗名、俳名はかり一枚に書ならへて、其後ハ有無

の便なし」と言つてゐる。支考は、芭蕉の供をしてこの時、白雪を訪問してよく知つてゐる間柄なのに、このやうに書いてゐるところをみると、白雪は元禄十五年頃から以後、余り支考などとは連絡がなかつたものらしい。とにかく、芭蕉をむかへた冬は、白雪にとつて印象深いものだつたらしく、それから八年も経つた後の書『誹諧管我』に、

一とせ翁に宿まいらせて

五六升雪のほしさや庭の松

の句を掲げて往事を偲んでゐる。芭蕉はこのとき

鳳來寺阪下の吟

木からしに岩吹とかる杉間哉

麓の門谷に一宿して

夜着一つ祈り出だして旅寝かな

同

の二句のありし事は、白雪自筆稿本『三河国名所詩歌連俳目録』や『笈日記』、『泊船集』にも見える。「木からしに」の句は『笈日記』には「おなし比（註、菅沼亭の句と）、鳳來寺に参籠して」との前書がついてゐる。「夜着一つ」の句の方は、『茶の草子』に、「みかほの国、鳳來寺に詣る道の辺より、例のやまひ起りてふもとの宿に一夜あかす」とてと前書して出てゐて、この時芭蕉の健康も余りすぐれなかつたことを記してゐる。この巻の不出来もそんなことに一つの原因があるかも知れない。同じ句を『白眼』には、「一とせ芭蕉此山にのほりて、日をくれ、麓の門谷に一宿、白雪心して山に云やり、臥具かりもとめて、夜寒を勞るゝした」と、その書の撰者轍士が記してゐる。

波に飛込船の遠浅

雪丸

(釈) 初表四句目。 雜。

(評) 棧橋のない遠浅の船着場。旅人は波の合間をはかり、裾をからげて舷から下りる。前句を冬の船旅と見て、遠浅に波にとびこまねばならぬやうな、棧橋とてないへんびな海岸をもち出した。作者、酔屋雪丸は桃後と共に『茶の草子』（元禄十二年刊）を上梓した人である。その書の路通の序文に「東参河新城住人、酔屋雪丸、新四郎桃先おもひ出し聞とむる句を集て……」とあり雪丸の号からすると、白雪の門人らしく、又阿誰軒の俳書目に本書の撰者に雪丸だけをあげてゐるのは、桃先がなほ若かつたためであらうと思はれる。

降く／＼て今日は無疵に出る月

芦雁

(釈) ○初表五句目。 秋（月）。月の座。

○無疵に出る月。 雲切ひとつないともとれるし、まんまるい月ともとれる。但し、「無疵にて、らす三五夜の月 江雲」「つもり見る古人の心式千貫 松意」（『虎溪の橋』延宝六年刊）。之らの用例からも満月の意とつてよからうか。

(評) 「降り／＼て」と雨ばかりで、このところ幾晩か姿を現はさなかつた月が、今日は美しい満月となつて照りかゞやいてゐる。前句を夜分のこととし、月に照らされ乍ら、舟から波にとびこみ上陸するさまと見かへた。前句を漁村の船着きと見立てたのである。作者、芦雁のこと未詳。

残る暑さの門の行水

桃隣

(釈) ○初表六句目。折端。秋(残る暑さ)。○門 かも。

『猿蓑』「市中」の巻「あつし〜と門々の声」。○行水。夏の季と思ひ易いが、当時は「昼寝」などと同じく無季であつたらしい。「行水も日ませになりぬ虫の声 来山」(『続今宮草』)、「行水の捨所なき虫の声 鬼貫」(『鬼貫句選』)、「行水や汗も埒も夕 祓 立圃」(『古選』)、「夕顔や行水捨る垣あかり 惟中」(『恒誠』)、「蝙蝠や行水の湯を空へうつ 存義」(『句鑑』)、「行水の醒てとくや杜若 洞爺」(『鶉立』)等、すべて他の季語をふくんでをり、「行水」は季語になつてゐなかつた事を示してゐる。

(評) 月光下、行水に残暑の汗を落す景。場面を農村に転じた。雨が晴れきつて、残暑の暑さを感じるのである。雨の間は涼しかったが、雨があがると、やはり残暑がきびしい。

小地頭の前に並居<sup>ル</sup>萩薄

扇車

(釈) ○初裏一句目。折立。秋(萩。薄)。○小地頭。知行万石以上の領主(大名)に対し、万石未満の旗本・御家人を地頭と称した。多くの場合江戸常住で在国出来ず、その代官が支配した。その代官、年寄、用人などを小地頭と云つた。

(評) 前句の門口で行水してゐる人物を小地頭と見据ゑたのであらう。萩や薄が行水のまへに生えてゐるが、その萩や薄を擬人化して面白く、前に並居ると云つた。小地頭、元来は惣領地頭又は惣地頭に対する名称で、その配下に属するのであるが、此句の場

合、「小」を文字通り「小」にとつて面白味が出ると思ふ。

終りのしれぬ下手の舞〜

以之

(釈) ○初裏二句目。雑。○舞〜 幸若舞をいふ。今日見物しても、すこぶる単調で退屈極まる悠長なものである。

(評) 前句の萩薄を、今度は小地頭の舞々見物陪観を許された(実は有難迷惑な)地方百姓衆に見立てた。前句、秋だから秋祭の余興かも知れぬが、とにかく上手な舞々でもかうかしまつて見たんじやあつまらぬが、おまけにそれがノンペンダラリの、いつ果てるとも知れぬ下手糞と来てゐる。あゝ足もしびれて来た。あくびも出かゝる。早くすまないかなあ。作者、以之は『新選俳諧年表』(平林・大西両氏著)に「宝曆九年七月十三日放、丹羽氏、名能少。千鳥庵と号す。尾張人。支考門八哲の一なり。絵を能す」とある。

鈴馬の拍子に乗つて口を取<sup>ル</sup>

(釈) ○初裏三句目。雑。○鈴馬。鈴つけた馬。街道筋の駅馬であらう。

(評) 前句を門付の舞々とやつして、様子を一变して街道筋の景をつけた。馬の口につけた鈴の音をさせながら、その拍子にのつてのんびり歩く馬と馬子。駄荷か乗懸か。舞々の単調な調子と馬の鈴。何かゆつたりしたハーモニイをなして居る。

代繼を祈ル九世の観音

桃後

(釈) ○初裏四句目。 雑。○代繼 よつぎ。家督相続の男子出生を祈るのであらう。「世繼をいのる」(桃の白実)。○九世の観音。 九世渡―九世戸。丹後天の橋立の観音であらうか。それにしては、桃後のやうな子供に、巨離的に少々遠すぎるから、何か新城附近にでも九世の観音と称する名高い観音でもあつたものか。

(評) 打越から場面転じて。馭馬の鈴の音をきゝながら、旅をして、はるばる靈験あらたかな観音さまにお祈りにゆく。お世嗣が出来なければお家は断絶する。太田半四郎の桃後は歿年不詳だが轍士の『白眼むち第二』(元禄五年刊)の桃後の句、「卯の花をうちつけながら泪哉」に、轍士が「ひかれぬ足に濁す夏川」と脇をつけ、「白雪が子、十二才の即興也。余に艶しく覺て脇に及びし」と添書してゐるのによると、この連句の成つた元禄四年は彼十一才のときに當る。余りにも幼なすぎると、代作ではないのであらうか。

佗人に明けてほどこす小袖櫃

芭蕉

(釈) ○初裏五句目。 雑。○明てほどこす。「明けては取らす」(桃の白実)。○佗人。 ワビビト。『冬の日』「狂句こがらしの」の歌仙前書に「笠は長途の雨にほこるび紙衣はとまり／＼のあらしにもめたり佗つくしたるわび人我さへあはれにおほえける云々」とある。 Pages of Dictionnaire Japonais-Français に

Wahibito, Homme triste, pauvre et misérable. とある。悲しく、貧乏で可哀相な人、といふ。俳諧では『冬の日』のやうに、もつと風狂的な意味に使ふが、こゝはバジエスの原義の通りであらう。○小袖櫃 小袖は、もめんの綿入れを「ぬのこ」といふに對する言葉で、絹の綿入れを云ふ。それを入れておく櫃。大きな櫃である。

(評) 前句の人物の downward 途次。神詣のかへりに、貧しい人ほどこしものをする氣持良さ。

あらはれらめく谷の笹原

支考

(釈) ○初裏六句目。 冬(あられ)。○はらめく。「はらつく」(桃の白実)。「はらめく」は或はばらめくと發音するのことも思はれるが、バジエスにハラメクのみあつてハラメクの語が見えない。はら／＼と音たてゝ降る。

(評) 谷の笹原に立つ佗人の庵。前句の人物の場所を想定したのであらう。あられがはら／＼降つて、いかにも寒々とした笹原の景である。雑の句が四句つゞいたので冬を出した。丁度寒い頃に巻いてるのでどうしても冬の句が出たがる。

熊の子の親を尋ねて鳴て居

桃 隣

(釈) ○初裏七句目。 冬(熊の子)。

(評) 今日でこそ熊は本州では丹波・紀伊より東北部の山奥、九州では大分宮崎の県境、本谷山・傾山<sup>カタムキ</sup>の辺だけにしか居らぬが、



當時はもつと広く棲息してゐた。『雨吟一日千句』三（延宝七年）に「罽の山熊しや／＼といひ立て 友雪」「はらの痛みやくたる滝波 西鶴」。『折つゝじ』「蠅ならぶ」の歌仙（元祿四年）に「畑の中に落ちいなづま 去来」「崩れ井に熊追落す夕月夜翁」などあり、熊を突見する機会も多かつたものと思はれる。熊の交尾期は六、七月頃で、七ヶ月にして一仔を産む。仔は冬、山中の穴の中で産れ、授乳せられ、雪解と共に親と一緒に穴を出てくる。その熊の仔が親を探してないてゐる、といふので、前句の荒涼たる景に、愛敬ある熊の仔のなき声を点出した。「嗚て居ル」といふ口語調も図体の大きいくせにかはいゝ熊の仔のかんじをよく出してゐる。

切つて附たる庵の三ヶ月

芦雁

（釈）○初裏八句目。 秋（三ヶ月）。月の定座。○切つて附たる。 何かから切り抜いて来てとつゝけた様な意。○庵。 アンとよむ。

（評）冬の句から秋の句へ、季戻りである。少し無理な附方だが、こゝが芭蕉時代の月の定座だから、仕方なしに三ヶ月を出した。三ヶ月は秋の季感とは、離れても考へられるから、之で逃げたのである。親を尋ねる熊の仔の啼き声。澄みきつた夜気。夜空に牙を渡つてゐる三ヶ月は、庵もろ共に、まるで芝居の書割りでも見てゐるみたいだ。「佗人に」の句以後、場の進展に乏しく渋滞の感をまぬがれぬ。もつと転じてほしいところ。又、三ヶ月は、熊の月の輪などの連想であらうか。

ひや  
寒初る罽炉裏普請に取かゝり

雪丸

（釈）○初裏九句目。 秋（寒初る）。○普請。 この場合、造作位の意。

（評）前句庵の内部に目を転じた。秋も深く肌寒い頃ともなつてやがて間近い冬の準備に罽炉裏の造作に取かゝる。前句の「切つて附たる」といふ月の鮮やかな感じに、秋もいよゝ深くなつた感じを見取つたのである。

鶉の籠は形がきはまる

扇車

（釈）○初裏十句目。 秋（鶉の籠）。○鶉の籠。「鶉籠棚の鼓に並びけり 召波」（『春泥発句集』）。鶉合せの鶉の鳥籠、丈低く方形であつたという。召波の句も鼓の丸との対比の面白さか。『嬉遊笑覧』の記事によれば、はじめて慶長寛永の頃流行し、また明和安永に再び盛行。鳥籠に贅美を尽したとある。『色音論』の記事や『犬子集』に「籠もちつれてかへるさの袖」「暮るより鶉合やみてあらん」と見えるのもその流行のあとを示してゐる。鶉は早朝よく啼くので、朝早くから鶉合の会があつたらしくその鳥籠は、明和頃には金銀を鏤め、贅をつくしたといふ。○きはまる きまる。きまつてゐる。

（評）前句を楽隠居と見据ゑて、数奇者の部屋の態をつけた。鶉合せのために、鶉籠の手入をし、それを眺めつゝ満足してゐる分限者の姿である。

花散りて靱は二葉に萌上り

以之

(釈) ○初裏十一句目。春(花)。花の定座。○二葉に萌上り。「二葉の萌上る」(桃の白実)。

(評) 前句の部屋から眺めやられる田園風景に転じた。桜の花がいつのまにか散つてしまつて、うつかりしてゐるうちに、はや苗代がライト・グリーンに變つた。初裏十一句目、こゝは花の定座で、この花を零す(こぼす)のは嫌ふ。ところで前句は鶉籠で秋の句だが、こゝで是非花を詠み込まねばならず、難かしいところ。幸ひ、鶉といふ鳥は、『和漢三才図会』にも、「凡春二、三月始<sup>テ</sup>鳴キ、至<sup>テ</sup>芒ノ種ニ止ム声ヲ、六月又更<sup>シ</sup>聲ヲ、至<sup>リ</sup>中秋ニ止ム声ヲ」と見えるごとく、春二、三月頃から鳴く鳥なのでこの句は前句を春の句に見直し、春の季節をつけたのである。「靱ふせてそれから遊ぶ花の陰 支考」(『住吉物語』)の句などによると、苗代の播種を了つて、それから花見に遊ぶ田園風景が偲ばれる。この附句は、右の支考の句より、更に夏に近づいてゐる。

春ともいはぬ火屋の白幕

桃鯉

(釈) ○初裏十二句目。折端。春(春ともいはぬ)。○火屋。ヒヤ。火葬場、焼き場のこと。古くは『和泉式部集』に「ひやといふものを作るを隣れと思ひて、歸りての夜月を見る。あはれこの月こそ曇れ昼見つるひやの烟は今や立つらん」。『大坂檀林桜千句』九に「一筋に花の浮雲かたし幕 益翁」「火屋あらたむる野

への下萌 本秋」、火屋には白幕をはつたもの。

(評) 無常の句。前句の「花散りて」の落花に無常を見取つたものか。春ともいはぬ。新緑萌る中に白幕。火屋の…でなかつたら本当に春らしい眺めた。「春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん」といふ様なところだのに。「年六十に余つて火屋へ片足踏込んで」(五十年忌歌念佛) などとあるは、「棺桶へ片足踏込む」と同じ意。焼場に白幕が張つてゐるのは、誰か人死があつたらしい。春は万物生成のときだのに、死ばかりは遠慮がない。凡そ春と正反対の風物。前句の晩春から初夏へ移る季節の感じにちと異なるものを持ち出して人々を驚かした。作者の桃鯉は『俳諧管我』によると、白雪の「母方のいとこ」にあたり、元文元年、白雪一周忌追善集「雪なし月」を上梓してゐる。その自著には、「予が伯母なるものは白雪妻也」と自ら記してゐるから、白雪との間に重縁関係があつたのであらう。

名やうく〜と時にかゝる雲霞

淡水

(釈) ○名残表一句目。折立。春(霞)。

(評) やうく〜と。前句「春ともいはぬ」に附く。「ほのぼのと春こそ空に來にけらし天の香久山霞たなびく」といふ風情である。之で「花散りて」以下、春が三句つゞいた。旅びとがやつとこさと時にさしかゝつた、の意か。やうやく時に霞のかゝる気節になつた、といふのか、この表現では至極あいまいであるが、やつと時にさしかゝつて、麓を眺めると、彼方の村里の火屋に白幕が張つてゐるのが見える。前句を遠望とみたのであらう。

フクス  
複子のしめる味噌の曲物

芭蕉

(釈) ○名残表二句目。雑。○複子。フクス。禅宗僧雲水の持つ風呂敷包のこと。複は袱。○曲物。マゲモノ。曲物は縮物(ワゲモノ)、檜や杉などの薄い材を縮げて作った凹形の器で、合目は樺、桜などの皮の細く切つたので綴ぢる。味噌の小売容器として運葉を使う仕出しが「この利養世上に見習ひ、是につまぬ困もなし」と特筆された頃(日本永代藏、六の「銀のなる木は門口の柵」)である。

(評) 曲物に蓋がないか、あつても完全に内味を風呂敷から遮断しない。染み工合から内味は味噌の曲物だと判断される風呂敷包みをさげた坊主が、春霞の峠を遠景として寺に帰りつゝある。あるひは、前句の人を、諸国行脚の雲水と見たてゝ峠に辿りついて休息し、弁当を食べようと風呂敷包を取り出すと、曲物に入れた味噌の汁気が滲み出て、風呂敷がしめつてゐる、とみた方が良からうか。

手を書と童に筆をとらせける

芭蕉

(釈) ○名残表三句目。雑。○手を書。テをカク。○とらせける。「とらせけり」(桃の白実)。

(評) 「この子つたらうまい字を書きますよ。」といふので、子供に字をかゝせる。前句禅林の匂ひから、寺の幼い小僧を点出した。ここ二句、つゞけて芭蕉の作である。この巻のやうな多数吟のとき、一人で二句つゞけて詠むことは、普通しないことだが

前句が難かしく連乗つけあぐんだか何かで、指導的な気持から、つゞけて自分でつけてみせたものだらう。

アカシノマツ  
明松を廻す夜仕事

白雪

(釈) ○名残表四句目。秋(夜仕事)。○明松を廻す夜仕事。「松明を割夜の仕事に」(桃の白実)。○夜仕事。よなべ 屋内にとる。藁細工や針仕事。○廻す。松明の位置を動かす訳ではない。上側と下側を廻し返へる事によつて火力を上げる。少しはつとくと、くすべ出して暗くなるので、くるりとひっくり返へして明るくするのである。

(評) 訪客と話しながら手はセツセと夜仕事に精を出す両親。その側で手習をする、或はお客さんに字を書いて見せる子。「桃の白実」の句形では、一句説明にすぎず面白くない。

海少へたゝる水のしはゝゆき

桃後

(釈) ○名残表五句目。雑。○へたゝる。「隔つる」(桃の白実) ○しはゝゆき。しほつばい。塩つからい。

(評) 前句の屋外の景。川岸と光洩れ来る家。海が遠くない事は風の運んで来る汐気から判る。或ひは、前句の明松を廻す夜仕事を、釣に解したか。夜釣りをしていると、何かのはずみに水が口に入ることもある。海近くの河水の塩つばい味を感じてゐるか。

秋風すごし義朝の墓

桃先

(釈) ○名残表六句目。 秋(秋風)。 ○義朝の墓。 平治の乱に敗れて東に逃れた源義朝は、平治二年正月、尾張国内海で、長田忠致父子に弑せられた。東海道宮より桑名まで七里舟渡しの船上より東の方にみえる尾張国野間の内海に墓がある。義朝の最後を描いたものに近松の『鎌田兵衛名所盃』(元祿八年)がある。義経と同じく気の毒な最後を遂げた義朝の悲劇的な生涯は、当時の人々に深い同情をもよほさせてゐたらしい。

(評) 義朝の墓は「海少へだゝる」位置にあり、前句に附く。了意の『東海道名所記』<sup>四</sup>より引用すると、「…舟ばたによりかゝり居る。男、いかに御房、ひがしのかたにみえたるは、いづくぞやと尋ねたりければ、あれこそ野間うつみといふ所にて侍べれ。そのかみ源の義朝都にして、信頼にかたらはれ、むほんをおこして、いくさに打まけ、東国におちゆかんと心ざし、是までくだりて長田が家にかくれ給ひしに、長田、日比の恩をわすれ、わがむこの鎌田の政清ともに、たばかりて、ころしける所也。おさだすなはち、義とも政きよか首を、都にもちてのぼり、平家にまいらせて、大なるけんじやうにも、あづからはやと思ひける所に普代の主君をころしける、不忠のもの也と、人々にくみければ、さして手がらとも聞えず、平家もかやうの者は、後の代までのころしにせよなど、ひしめきければ、長田はとる物もとりあへず、にげくだりけり。平家西国におちて後、頼朝へかうさんして出けるを、よく西国にくだりて、いくさをいたせ、けんじやうは忠節によるべしとのたまへば、おさだよろこび西国にくだり、命をも

かへりみず、敵おほくうちとり、鎌倉へかへりしを、頼朝とらへて磔にかけられたりと申す。今に義朝の石塔あり。」とある。なほ『守武千句』に「月見てや常盤の里にかゝるらん」「義朝殿に似たる秋風」とあり、芭蕉の『甲子吟行』にも「…美濃に至る。今須山中を過て、いにしへ常盤の墳あり。伊勢の守武が云ける、義朝に似たる秋風、とはいづれの処にか似たりけむ。我もまた」とあつて、「義朝のこゝろに似たりあきの風」の句が見える。保元の乱に、父為義をはじめ、弟たちを失ひ、今又平治の乱で、常盤御前や幼い子供たちと別れた上、思はぬ異郷で無惨な最後を遂げた義朝の墓は、その生涯を憶へば一層あはれが深いものであらう。

そば切のあれ行儘に道附て

桃鯉

(釈) ○名残表七句目。 秋(そば切)。 ○そば切 吾仲の『栴表紙』(元祿十五年刊)に「そは切の名残を吹や青あらし 素籠」の句がある。或は「そばかり」とよむか。なほ、この一句、「蕎麦畑あれ行まゝに道附て」(桃の白実)。(評) 義朝墓のあるあたりの、山畑の景。荒れ放題に荒れてゐるが、その山のそば畑に苅りにゆくの、あれた畑地に自然と道がついた。

小づらのにくき衣／＼の月

雪丸

(釈) ○名残表七句目。 秋(月)。

(評) 早朝、まだ夜もあけきらぬうちに、あまりにも明るい月に欺かれて、女と別れて来た男が、空にぼつかりかゝつてゐる月に何だか自分が馬鹿にされてゐるやうに見える。もつともつと、女と一緒にゐたかつたのに、あの小面にくい月め。後朝の別れに悪まれるのは、お月さまと鶏か。荒れた蕎麦畑をかへるのも、ものういものだ。『如行子』所収、「ためつけて」の巻に、「もう山の端に月の一ひら 聴雪」「きぬくや烏帽子置く床忘れけり 越人」の附合があるが、こゝはこの句で始めて恋の句が出た。

さまざまの恋は馬刀貝忘れ貝

支考

(釈) ○名残表九句目。 雑。 恋の句。 ○馬刀貝忘れ貝 「うつけ貝」(桃の白夷)。「国性爺合戦」ニ「はまつたひ」に「ねもせでひとりあかにしの、誰をまてとや、人の見るくい忘れ貝、我ふたりねの床ふしは、身にしどみ貝いわひがい」の用例の如く、「待て」「忘れ」共に恋の詞を貝、尽しに托したもので、『松風村雨束帯鑑』にも「此の世も忘れ貝、浦の塩貝、うつけ貝」と見えてゐる(同様の技巧、西鶴の『曆』にもあり)。この場合貝その物のイメージを思ひ浮べる必要はない。色々さまざまな恋を経験して来たといふのであらう。なほ、馬刀貝は、真直垂田柱状の長い二枚貝、殻黒く、竹管に似て、長さ三四寸ある。忘れ貝は、殻は扁平で厚く、前方は少しとがり、後方円く淡紫色で裏面は白い。(評) 前句、この巻で始めて恋の句が出たので、一句ですてるのも惜しく、甚だ漠然としたものだが、又恋をつけた。後朝の戻り道、月を眺めながら、自分も若い頃から、何とさまざま恋をし

て来たことよ、それももう今となつてはみんな忘れて了つたよ。と自ら述懐してゐるさまであらう。——といふより、そんな具体的な想念より、もつとこの句の言葉の調子に自ら興じて、面白がつてこんな句をつけたのであらうか。前句の具体的な恋を、観想的な恋に転じたのである。

乞食と成て夫婦かたらふ

芭蕉

(釈) ○名残表十句目。 雑。

(評) 芭蕉の所謂、「一巻」中に「あらまほし」い「物語の躰」である。「さまざま」に品かはりたる恋をして 凡兆「浮世の果は皆小町なり 芭蕉」。彼の有名な「市中」の巻の歌仙の恋句の二番煎じと評するは酷か。流石の芭蕉も、本巻の如く連衆のレベルが低くては力の振るひ様もあるまいと気の毒にさへ感ずる。それに、前記の如く、芭蕉の体の調子も悪かつたらしいから、良い加減につけたのであらう。前句の恋のなれの果てである。

さて、こゝの附合につき、石今の『芭蕉翁附合集評註』下巻に「前句へたゞいひのべたるのミの句にて、させるこゝろなけれど後句引おこして、思ひの外の恋をつけたる働なり。句意へはじめへともにいやしからぬ人の、恋のあやまちよりさまざまにさすらひて、つひに乞食とまでなりても、ともに情ふかく、こゝろつゆもかへぬせつなる中也。さまざまにと、前句にいひならべたるをいろくうきふしにあひたるよしにとれり」と評してゐる。いかに、石今の言の如くであらう。さまざま恋のひとつの相(すがた)を描いたのである。

さしむくる背中の雪を打はらひ

芦雁

荷を負ながら牛は寐ころぶ

桃後

(釈) ○名残表十一句目。 冬(雪)。

(評) 乞食となつても夫婦仲よく暮らしてゐる二人が…ではあんまりつきすぎてゐる。いかにもまづい附方である。雪空に物貰ひに出歩いてゐた夫を迎へての妻の愛情か。

きれたる弦を押なほす弓

以之

(釈) ○名残表十二句目。 雑。 ○弦を押なほす 「絃を引直す」(桃の白夷)。

(評) 前句の夫婦の愛情から転じて朋友間のそれにさまを見かへてつけた。弓場で稽古してゐるうちにぶつり弓の弦が切れた。それを力をこめて、なほしてやつてゐる。

キヤ素湯一ツ御寺見かけて呼びけり

扇車

(釈) ○名残裏一句目。 雑。 ○素湯 さゆ。

(評) 歌仙も終りに近づいて、破から急に移つた。弦をはる前句を乱戦の貌に引きうつした。戦決して落ち行く敗軍の武者が一名(将)とまでは限らずとも、ともかく一塵の土でないといつたりしない様だ)。路傍に一寺を見かけ、戦場も近いこととて住僧は居つても奥深く引っこんで居るので、「卒爾ながら素湯一杯所望」と大音にて申入れる。之も前句に余りつきすぎたてめて余情に乏しむ。

(釈) ○名残裏二句目。 雑。

(評) 前句、心あはたぐしい人に対して、牛はのんびりと荷を背負ひながらねころんでゐる。往還の景。対応の附である。

めたくと日向タの花盛り

白雪

(釈) ○名残裏三句目。 春(花盛り)。 ○めたくと。 めつ

たやたらにの意カ。「めた」の語の用例「八重桐 此君も大夫の勤也。何も其心立大きによし。然有ととも、めたと御ちまんハ無用也」(『吉原大豆俵評判』天和三年刊)『全国方言辞典』には、(副)「メタメタ」。むやみに。やたらに。しきりに。度々。「メタく食へると腹をこわすぞ」群馬県碓氷郡・長野県佐久地方・山梨・静岡県庵原郡とある。なほ、この初五、「めきくと」(桃の白夷)。

(評) むやみに陽のあたる場所の花が満開だ。前句の荷を負つたまゝ寝ころぶ牛とよく気分がひびき合つてゐる。名残の裏は、この二句あとの五句目が「句の花」で、花の定座だが、荷を負ひながら、牛のねころぶ、といふ前句に長閑な春の気分を感じとつて少し早いが花を出してしまつたのであらう。「めたくと」はメシエに Metametato (adv.) メタメタト Manière D'attaquer ou de se précipiter un grand nombre contre quelqu'un dans sa maison pour le tuer, ou pour renverser ou détruire, etc. Metametato iyeye toricaketa, メタメタトノエトツカ

ケタ、 Ils envahirent tout à coup et en grand nombre sa maison. 即ち「家の中にゐる人に向つて、殺すためか、打倒するか、撃滅する目的で、大挙して攻撃する方法、乃至は突撃する方法。メタメタトイエヘトリカケタ。彼らは突然、大挙して彼の家に侵入した。——以上の如き註からみて、「めためた」とはやはり、多量に一度にとつと、といふ風な感じの言葉らしい。

柳の糸がひたる石鉢

淡水

(釈) ○名残裏四句目。春(柳の糸)。○柳の糸が「柳の糸の」(桃の白実)。柳の枝の細くしだれたのを糸に見立て、という。「あら青の柳の糸や水の流 鬼貫」(「鬼貫句選」)。○石鉢。『好色一代女』—「淫婦の美形」に「雨遣ひして袖口より風を入、しはしありて手水に立。石鉢に水はありとも改めて水かへさせて、静に口中などあらひ。禿いひやりて供の者に持せ置し白き奉書包の煙草とりよせ呑など」。縁先の手水鉢などに用ひる、大きな石細工の鉢のこと。

(評) 厨から出て、柳の細枝がそよ風にゆれる石鉢で手水つかひながら、不図前方日向の花盛りに目を奪はれ、柄杓もつ手が動きを忘れる。

念仏にすゝめこみたる蝶の夢

桃先

(釈) ○名残裏五句目。春(蝶の夢)。本当は花の定座。○蝶の夢。『一葉集』には「蝶の友」とある。『莊子』「齊物論」に

「莊周夢に胡蝶となる云々」。用例「君や蝶我や莊子が夢心 芭蕉」(『哲歌仙』)

(評) 前句、なんとはなしにお寺の縁の様な感じ。それを承けて僧が春の昼さがり、ついうとくとして蝶のとびかふ夢をみ、覚めていつしか念仏を唱へてゐた。蝶の夢といふと、すぐ例の莊周の故事が引合ひに出されるが、こゝは作者が十二、三才の少年だから、そこまで考へては考へずごしであらう。

又幾度の彌生目出度

桃隣

(釈) ○揚句。春(彌生)。○目出度「めてたき」(桃の白実)。(評) 前句の蝶を夢みて念仏を唱へる人を、結構な老人の身の上ととつて、今までも何度も春の彌生をむかへた、この上にも「又幾度」の春をと、めでたく長寿を重ねたひとの面影を髣髴せしめる。平凡で例の調子ながら、まづはめでたい揚句である。なほ、この歌仙季の配置が次のやうになつてゐる。即ち、

初表 〓 冬・冬・冬・雑・秋・秋。  
初裏 〓 秋・雑・雑・雑・冬・冬・秋・秋・春・春。  
名残表 〓 春・雑・雑・雑・秋・秋・秋・雑・冬・雑。  
名残裏 〓 雑・雑・春・春・春・春。

右のやうに、夏の句が全然ないといふ珍妙な連句である。そして寒々した時分に卷いたせいとか、何となくそさむそうな句ばかりが多い。芭蕉が一座してさばき乍ら、初裏の五句目まで句を出してゐず、しかも全部で三句しかつけてゐぬのも、熱意の足りない感

じがする。そして、又、「九世の観音」、「火屋の白幕」、「複子」、「義朝の墓」、「御寺見かけて」、「念仏にすゝめこみたる」等、一卷中釈教や無常がむやみと多すぎ、恋句のはなやかさも乏しいまゝ、何だかしめつぽく氣勢の揚らぬ作品になつてしまつた。平明な句が多くて一向はりあひのない、つまらない巻である。芭蕉は「哥仙は三十六歩也。一步もあとに帰る心なし」(『三册子』)の言葉を以つて連句指導の根本精神としたと云はれる。この歌仙はまあ前進はしてゐるかも知れぬが、然し、それが二三歩行つては足踏みし、二三歩行つては数歩止まる様な進み方であるやうに感じられる。即ち「佗人」の句から数句、「小づらのにくき」から数句、終りの数句は、何れも情にひかれて変化進展に乏しいと思はれる。又、あの『猿蓑』の連句に見られた極度に張られた二つの金線が互に共鳴し合ふやうな、ひゞきの附、滑かに実に無理なく附句に転じて行く、うつりの附味、又、漂渺と感合しあふにほひの附味、——さうした勝れた附合を殆ど見出し得ない。これも亦、多人数の新弟子達を指導して興行した習作の一つと云へようか。

(終)